

金子みすゞ

長門市
(1903~1930)



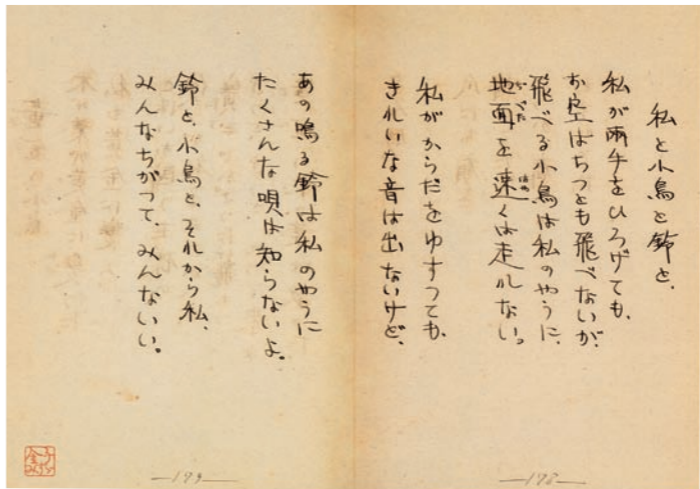
提供・金子みすゞ著作保存会

【著作】

『金子みすゞ全集』(昭和59・JULA出版局)
『わたしと小鳥とすずと』(昭和59・JULA出版局)
『ほしとたんぼ』(昭和60・JULA出版局)ほか

金子みすゞ(本名テル)は、明治三十六年(一九〇三)に山口県大津郡仙崎村(現・長門市)に生まれる。大正末期から昭和の初めにかけて、主に雑誌『童話』に投稿し、選者の西條八十に、「若き童謡詩人の中の巨星」と称賛された。大正十五年(一九二六)版『日本童謡集』(童謡詩人会編)には、北原白秋、西條八十、野口雨情、三木露風などにまじり、女性でただ一人選ばれて掲載されるなど、若い文学少女たちの憧れの星となった。しかしながら昭和五年(一九三〇)、二十六歳の若さでこの世を去ったため、その後半世紀以上、その作品と生涯は埋もれたままになり、「幻の童謡詩人」と言われていた。昭和五十七年(一九八二)、童謡詩人・矢崎節夫氏の十六年にわたる「みすゞ探し」の結果、実弟上山雅輔氏(本名正祐)のもとに残された五百十二編の遺稿が見つかり、昭和五十九年(一九八四)、『金子みすゞ全集』(JULA出版局)として出版され、広く知られるようになった。みすゞは、漁業で栄えた仙崎の風土の中で、いのちのこと、生かされてあることなどを、深い優しいまなざしで見つめた。それゆえ、その作品は、この地球上のすべてのものに思いをはせ、見えないけれどあること、ちがうことの素晴らしさなど、人として大切なことを訴えかけるものばかりである。

(文・草場睦弘)



「私と小鳥と鈴と」
(金子みすゞ自筆ハガキ・JULA出版局)



遺稿集「美しい町」「空のかあさま」「さみしい王女」
みすゞの全作品512編が、3冊の手帳に収められている。
実弟上山雅輔(本名上山正祐)氏が52年間守り続けたもの。



大漁 詩 金子みすゞ
朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鯛の
大漁だ。
遠は祭りの
やうだけど
海のかなかでは
何萬の
鯛のとしらひ
するだらう。

(注) 詩は『金子みすゞ全集』
(JULA出版局より)

金子みすゞ 年譜

(提供・草場睦弘)

| | |
|-------------|-----|
| 明治36(一九〇三)年 | 二歳 |
| 明治38(一九〇五)年 | 三歳 |
| 明治39(一九〇六)年 | 四歳 |
| 明治40(一九〇七)年 | 七歳 |
| 明治43(一九一〇)年 | 一三歳 |
| 大正5(一九一六)年 | 一六歳 |
| 大正8(一九一九)年 | 一七歳 |
| 大正9(一九二〇)年 | 一八歳 |
| 大正11(一九二二)年 | 二〇歳 |
| 大正12(一九二三)年 | 二一歳 |
| 大正13(一九二四)年 | 二二歳 |
| 大正14(一九二五)年 | 二三歳 |
| 大正15(一九二六)年 | 二四歳 |
| 昭和2(一九二七)年 | 二五歳 |
| 昭和3(一九二八)年 | 二六歳 |
| 昭和4(一九二九)年 | 二七歳 |
| 昭和5(一九三〇)年 | 二八歳 |

4月11日、山口県大津郡仙崎村(現・長門市)に、父金子庄之助、母ミチの長女として生まれる。本名テル。二歳年上の兄堅助がいた。2月23日、弟正祐(のちに劇団若草を創った上山雅輔)生まれる。2月10日、上山英文堂書店の清国宮口支店長であった父庄之助死去。遺族は仙崎で金子英文堂書店を営む。弟正祐、上山英文堂店主上山松蔵(母ミチの妹フジの嫁ぎ先)の養子となる。4月1日、テル、瀬戸崎尋常小学校入学。3月20日、テル、瀬戸崎尋常小学校卒業。4月11日、大津郡立大津高等女学校(現・山口県立大津緑洋高等学校)に入学。以後、同窓会誌『ミサヲ』に「ゆき」「我が家の庭」「さみだれ」「社会見学の記」などの作文が掲載された。8月26日、母ミチ、上山松蔵と再婚。(フジは大正7年死去)3月24日、テル、大津高等女学校卒業。11月3日、兄堅助が、テルの小学時代の同級生と結婚。4月14日、テル、下関の母のもとに移り住み、まもなく上山英文堂商品館内支店で働き始める。6月初めごろよりペンネーム「みすゞ」で童謡を書き、雑誌に投稿を始める。雑誌『童話』9月号に「お魚」「打出の小槌」「婦人倶楽部」9月号に「芝居小屋」「婦人画報」9月号に「おとむらい」、『金の星』9月号に「八百屋のお鳩」を発表。『童話』誌上で、選者の西條八十に認められ、若き投稿詩人たちの憧れの星となる。4月18日、西條八十渡仏。この年、童謡詩人会が発足。テル、佐藤義美、島田忠夫、渡辺増三等の「曼珠沙華」に参加。自選集『琅玕集』を始める。1月6日、弟正祐、テルの結婚話を聞き「建白書」を出す。2月2日、正祐、テルに涙の談判をする。(正祐はこの結婚話に反対だった)この頃すでに第一童謡集『美しい町』、第二童謡集『空のかあさま』完成。2月17日、テル結婚。上山英文堂の二階で新婚生活を始める。3月、西條八十帰国。雑誌『童話』(西條八十先生歓迎童謡号)の特別募集で「露」が第一席になる。7月、童謡詩人会編『日本童謡集』の「お魚」「大漁」掲載される。11月14日、長女ふさえ生まれる。夏、下関駅で西條八十に会う。この年の暮れ、テル発病。3月、島田忠夫、商品館にみすゞを訪ねるも、上新地の自宅に病臥していて会えず。(この前後より創作と文通を禁じられる。)夏から秋にかけて、三冊の遺稿集を清書。(一組は西條八十に、もう一組は弟正祐に託す)10月より娘ふさえの言葉採集した『南京玉』始める。2月別居。2月9日『南京玉』止む。2月27日、正式離婚。上山英文堂に移る。3月9日、下関市亀山八幡宮隣り三好写真館にて、最後の写真を写す。3月10日、上山英文堂内で死去。享年満26歳。(矢崎節夫著「童謡詩人金子みすゞの生涯」(JULA出版局)より抜粋)